



少しの勇気と「自由」がいじめを救う

屈強なAさんと臆病なB君が、あるいじめの現場に出くわした。二人同時に助けには行けないとする。Aさんは「いじめは当人の問題で、ほっとくのがよい。助けに行くなら私だが、B君がいくのは危険なのでやめるべきだ」と考えた。一方、B君は「屈強なAさんが行くべきだ。Aさんが行かない時は自分が助けに行くかほっとくか迷うが、いじめはよくないので、“少しの勇気”を出して自分が助けにいくのがいい」と考えた。以上の考えを、

《ほっとく》: いじめの現場をほっとく。

《屈》: 屈強なAさんが助けにいく。

《臆》: 臆病なB君が助けにいく。

とにおいて優先順位で現すと、

屈強なAさん:

《ほっとく》 > 《屈》 > 《臆》

臆病なB君:

《屈》 > 《臆》 > 《ほっとく》

の順で“望ましい選択肢”と考えて

いることになる。どういう理屈でどう選択するのが“よい”だろうか?

他人に迷惑をかけない限り、個人の選好を優先する“自由主義”の仮定をおく。すると《臆》と《ほっとく》の優先順位に関してはB君が決めることなので、Aさんの意見は採用されずB君の意見が優先される。よって《臆》 > 《ほっとく》となる。また《ほっとく》と《屈》の優先順位は、Aさんの自由なので《ほっとく》 > 《屈》となる。以上か

ら、最終的に《臆》 > 《ほっとく》 > 《屈》となり「臆病なB君が助けにいく」が勝ち抜くことになる。

ちょっと考えてほしいが、もともと、AさんもB君も共に、B君よりもAさんが行く方がよいと考えていたのではないか?

これは、1970年に経済学者アマルティア・センが示した有名な「自由主義のパラドックス」¹⁾である。個人の自由を保障し、各人の選択を積み上げて社会全体の選択肢とした時に、もとは誰もが望まなかった結果

になりうるということが分かり、厚生経済学の分野で大問題となった。現実社会でも、“個人の自由”と“社会的に望ましい状態”の両立は難しいのだが、理論的にも難しいことが証明されたのだ。

パラドックスを解消しようと多くの研究がなされた。大方は個人の自由を制限する方向だったが、セン自身は「全員が一致した選好順序を、あえて

採用しない²⁾」という驚きの解決法を提案した。

ところで、もしB君が《ほっとく》 > 《臆》と選択したら、いじめ現場はほっとかれてしまったのだ。B君の“少しの勇気”により、B君自身が助けにいく羽目になったのだが、助っ人任務が成功したかどうかは想像におまかせしよう。(外園 康智)

1) セン自身は、『チャタレイ夫人の恋人』の本を、捨てるか、読むとすれば誰が読むか、という例で示している。

2) パレート最適性条件の方を問題視する解決法である。

